

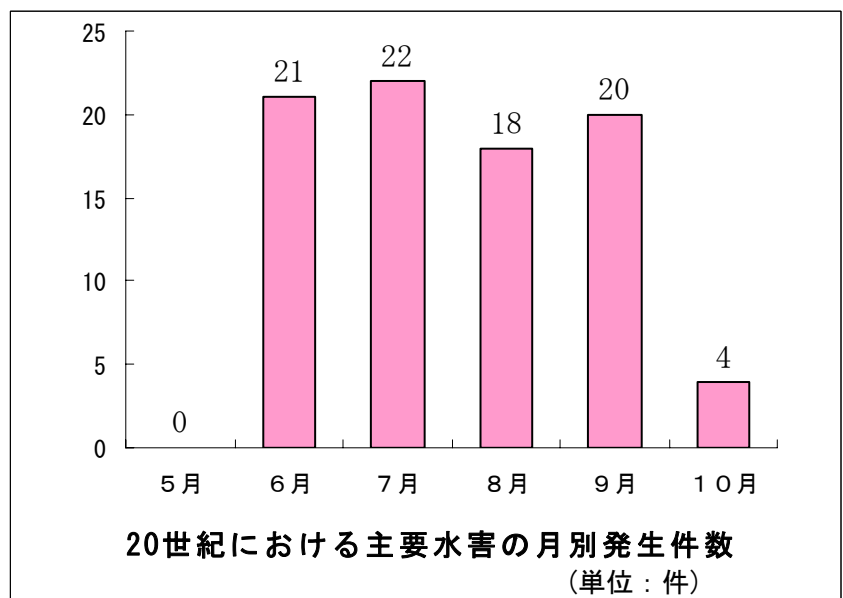
災害にご用心

「五月十四日朝より大雨降り続き、夜雨風大荒れ、十五日朝大高水堤一杯、上川原去^{うし}丑夏堤切れ候処、又四つ半時に切れ候、それに付田地大荒れ也、川筋処々大荒れに候」

これは江戸時代末期の慶応2(1866)年に三田の町年寄(現在の区長に相当)が記した日記の一節です。5月14日は新暦7月7日で、この日から一昼夜降り続いた大雨のために翌朝9時ころ上川原(現在の市役所付近)で堤防が決壊し、流域が「大荒れ」になったと記されています。この場所は「丑の夏」つまり慶応元年夏にも決壊したばかりといい、毎年のように水害に悩まされた当時の苦難がうかがわれます。しかも慶応2年は4月中旬(新暦6月初旬)ころには「晴天にて水大困り」という状態でしたから、この豪雨による高水(洪水)は突発的なものだったようです。

市域の月別平均降水量は5月から急速に増加し、6月が最高で9月までの間に年間雨量の過半が観測されます(市史第10巻地理編参照)。市街地で気象観測が始まって今年で30年が過ぎましたが、最大時間雨量(昭和53年)と月間最多雨量(平成11年)の記録はともに6月に観測されています。また日最高雨量も、一昨年10月の台風23号で観測された188ミリに次ぐ179ミリの記録は平成11年6月29日に観測されています。

新聞記事から20世紀の一〇〇年間(明治34年～平成12年)の主な水害を月別に集計すると、6月から9月までの間はほぼ平均して20件前後ずつ発生しており、10月も含めて6月からの5カ月間は災害に対する警戒がゆるめられない期間であると言えます(グラフ参照)。かつての三田市にとってこの5ヶ月間は渇水と水害が常に背中合わせになった苦難の季節でした。



昭和63年の青野ダムの完成と河川改修の進捗によってその記憶は急速に薄れつつありますが、日降水量や時間雨量の上位記録の約半数は最近の10年間で更新されています。災害に対する油断は今でも禁物です。